

### 仙台七夕まつり

#### ●七夕の起源

七夕の起源は、織女・牽牛の伝説に基づく中国の古い星祭の習俗である乞巧奠<sup>きこうでん</sup>と、日本古来の棚機つ女<sup>たなばたつめ</sup>の信仰とが融合したものとする説が有力とされています。

日本では、古来、正月の七草の日と7月7日は、祖霊を迎える祀りの準備に入る斎日で、七夕は盆の準備のための禊<sup>みそぎ</sup>の行事であるとともに、田の神を迎えて秋の豊作を祈願する農耕行事でもありました。このようなことから、七夕は、中国伝来の行事と日本古来の信仰・伝承や盆行事など、さまざまな要素が複合して今日に至ったものと考えられています。

七夕はもともと旧暦7月の行事でしたが、明治6(1873)年の新暦採用後は、多くが新暦の7月7日、あるいは月遅れの8月7日に行われるようになりました。

- 乞巧奠：織女星・牽牛星が視覚的に最も接近する旧暦7月7日の夜に供え物をして2星を祀り、子女の技芸の上達を祈る中国の祭事。奈良時代に中国の風習が伝わって宮中の儀式として始まり、後に民間でも行われた。
- 棚機つ女：棚機(たなばた)は棚のある織機。「つ」は「の」と同じで、はたを織る女の意。

#### 【コラム】

##### ～たなばたの語源～

日本には古来、「棚機津女」(たなばたつめ)という巫女が、水辺の機屋で神の降臨を待つという禊の伝承があり、この棚機津女の下略で棚機の読みと、中国の織女・牽牛星の伝説に基づく乞巧奠の習俗が結びついて、七夕を「たなばた」と読むようになったとするのが一般的とされています。

一方、農村地域では、古くから豊作を祈って種を蒔く種播祭り(たなばたまつり)があり、宮中で行われた七夕(しちせき)の行事が民間に広まった際に混同され、「たなばた」と呼ばれるようになったとする説もあります。

#### ●仙台七夕の歴史

毎年、8月6～8日の3日間にわたって開催される「仙台七夕まつり」は、藩政時代から続く長い歴史と伝統を持つとともに、豪華絢爛な笹飾りが人々を魅了し、日本一と称される七夕祭りです。例年200万人を超える人出で賑わい、仙台の夏の風物詩となっています。

仙台七夕は、藩祖伊達政宗によって江戸風の七夕が取り入れられ、婦女子の文化向上を目的に奨励してから年中行事として一般に広まり、盆の準備・田の神を迎えるための行事と融合して、一層盛んに行われるようになったと考えられています。

七夕は、明治維新の変革や第一次世界大戦後の不景気などから全国的に衰退していましたが、昭和2年に不景気を吹き飛ばそうと仙台の商店街の有志が復活させました。翌3年には、東北産業博覧会にあわせて、現在と同じ新暦の8月6～8日の3日間にわたって七夕祭りが行われ、初めて飾り付けコンクールが催されました。

戦時中には、ほとんど行われていなかった七夕ですが、昭和21年には、空襲で焼け野原となった商店街跡に52本の竹飾りが飾られ、翌22年には昭和天皇の地方巡幸を歓迎して5,000本の竹飾りが沿道に並べられて、大規模な飾り付けの七夕まつりが復活しました。そして、庶民の年中行事であった七夕は、七夕祭りという商店街のイベントとして豪華さを増すとともに、



写真提供：宮城県観光課

全国各地でも行われるようになりました。戦後に始まった各地の七夕祭りの多くは、仙台七夕をモデルにしたものといわれています。その後の仙台七夕は、商店街の振興から次第に観光イベントへと変貌し、豪華絢爛な笹飾りや規模の大きさなどから「日本一」と称されるようになり、高度経済成長の頃からは東北三大祭りの一つに数えられ、全国から観光客が訪れる大きな祭りになりました。

また、仙台七夕の飾り付けは、国内ばかりではなく海外でも行われています。中でも南米のブラジルでは、昭和54年に始まった「サンパウロ仙台七夕祭り」が、サンパウロ市のイベントカレンダーに掲載されるほどの規模で行われているほか、ブラジル国内の30都市以上で七夕祭りが開催されるなど、同国の冬の風物詩になっています。

## ●七夕飾り

仙台七夕まつりは、彩り鮮やかな和紙で毎年新しく手作りされる豪華絢爛な笹飾りと、七つ飾りと呼ばれる飾りものに特徴があるといわれています。

中心商店街などに代表される大規模な笹飾りは数カ月前から手作りで準備が進められ、その内容は飾り付けの当日まで秘密とされています。また、いわゆる七つ道具と呼ばれる、仙台七夕に欠かせない七つ飾りにはそれぞれに願いが込められています。豪華な笹飾りの中に七つ飾りを探し、地域の素朴な笹飾りを味わう七夕見物もまた、趣のある楽しみ方の一つとされています。

### <七つ飾り>

吹流し(ふきながし)	機織や技芸の上達を願う。大きなくす玉は、戦後に考案された仙台発祥の飾り。
短冊(たんざく)	学問や書、手習いの上達を願う。
紙衣(かみごろも)	裁縫や技芸の上達を願う。病気や災難の厄除けの意味も持つ。
千羽鶴(せんばつる)	家の長老の年の数だけ折り、家内安全、延命長寿を願う。
巾着(きんちゃく)	巾着は昔金銭を入れ腰に下げたもの。商売繁盛、富貴を願うとともに節約・貯蓄の心を養う。
投網(とあみ)	豊漁、豊作を祈る。幸運を寄せ集める意味も持つ。
屑籠(くずかご)	七つ飾りを作り終えたくずを拾い集めて入れる。ものを粗末にせず役立て清潔と儉約の心を養う。

## ●ジンクス

仙台七夕まつりには、祭り期間中1度は雨が降るというジンクスがあります。実際、ここ3年間をみても毎年雨が降っているように、3日間とも晴れるという年はあまりみられません。

雨は、紙で作られた笹飾りにとって大敵であり、雨が降ると、飾りを収納したりビニール袋で覆ったりしなければならぬばかりではなく、見物客の行動が制限されたり、「星の宵祭り」や「夕涼みコンサート」などの関連行事にも支障が生じることとなります。もちろん、夜の雨は星祭りにはなりません。

一方、七夕は田の神を迎えて豊作を祈る農耕行事でもあるという観点からは、適度の雨は恵みの雨としてむしろ歓迎されることとなります。七夕の雨は、古くから庶民、特に農民の願いに応え、豊作をもたらす使者として毎年訪れるのかも知れません。

仙台七夕祭りは、幾多の苦難の歴史を経ながら、人々の熱い想いで引き継がれ発展してきた貴重な地域資源です。

さらなる浸透・振興によって、伝統の継承と地域の一層の賑わいに資することが期待されます。



写真提供：宮城県観光課

資料：(株) 講談社「暮らしのことば 語源辞典」 (株) 福武書店「博学紀行宮城県」 河北新報社「宮城県百科事典」  
宮城県HP 仙台市HP 仙台商工会議所HP ほか